

醫學管錐外集

九

☒  
i18-2



490.9  
 Ig-4  
 9  
 No. 2054  
 12. 18-2



富士川文庫

1266

醫學管錐外集卷九

青蛙治水腫 下利至全年日時復發

白帶下用白葵花 內疝散 附橘核丸

蝟皮治痔漏 蜘蛛絲治瘤

養生丹治吐乳 附二氣散

解體體解之別 用敗毒散治安

皇朝之米可與人參比

白頭翁加甘草阿膠湯

渴有屬虺者

先哲醫話序附釋文

當歸荆芥散 舉卿古拜散

九折堂山田  
 氏圖書之記

勿誤藥室方函口訣批評

辨溫疫論  
瘧病燥濕辨

神授丸  
當歸四逆湯

飲食偏嗜  
肺癰者法

室時之末可與人參也

用娘養精中安木

用娘養精中安木

白帶不用白藥水

青龍水煎

不候至三月日朝發

醫學堂雜記卷六

大德堂



蘭軒段西談  
三十  
七葉  
甚親故載其說

二載青蛙治水腫說與犬塚氏所說同蓋蘭軒先生與印南翁交

### 青蛙治水腫

犬塚印南曰龍野岡大夫與余有姻其妻木氏言同

僚某名失其妻病水腫腹如匏瓠欲裂絕粒旬餘唯日

飲水數升耳醫療無驗家人慨嘆俟死耳有人言生

土鴨名大カハ治腫其母信浮圖聞之泣曰針藥

不及命也奈何殺此生物以累罪業乎且女平日視

猶慈之况使生啖乎吾弗忍也而妻渴滋甚夜必命

婢置水桶于枕側比曉省之則無餘瀝矣而猶訴渴

弗已時方仲夏一夜更深闔家就寢獨聞窸水鏘

愈不勝渴欲往飲而弗能起也乃奮投床下展轉滿

伏僅達泉下掬飲適意快不可道忽覺有物冷墜

青蛙治水腫

頸取而視之則土鴨也妻向因悶間略聞其事意也  
惡焉忽得之以為天錫也便仰吞之一下不滄喉亦不  
勝困悶也乃復展轉蒲伏還寢比天曉便如瀉牀蓐  
悉濕其母晨往問其疾苦則曰稍減矣問能食否則  
曰欲食乃急呼粥一啜而盡母大喜細問故乃告以  
土鴨母曰此真天貺也自是脹滿漸減經日平愈按  
本草蟲部毒蟲主治利水消腫李時珍又引戴原禮證  
治要訣附載其方是土鴨本治水腫或者之言其必  
有所聞矣吁天下之事固有其理而敗于時拘者十  
八九要之未獲天貺也然天不虛貺如某氏者豈嘗  
有陰善欵是文化辛未之事越人關弓錄

二證治要訣有渾身水腫以青蛙一二箇去皮火炙  
食之腫退亦有單獨腹脹用亦効者卷三六九  
三脉本効  
上有不字今從一本刪去

一 聖惠方

本草綱目李時珍曰鼈產於水與螺蚌同性故能  
解熱毒利水氣但係濕化之物其骨性復熱而今  
人食者每同辛辣及脂油煎燒是抱薪救火矣安  
能求其益哉按戴原禮證治要訣云云卷四十七  
毒

又李時珍曰田雞水雞土鴨形稱雖異功用則不也卷四十二毒蟲集解

本草啓蒙毒アヲガヘルアシナガガヘルカハズノ一種綠色ニメ水中ニ住聒ク鳴者ナリ集解ノ土鴨ハ大青蛙ナリ事物紺珠ニ似青蛙大腹鳴甚壯一名耿鼃ト云卷三十八

胃下利至年月日時復發

金匱輯義卷四  
當參攷四ノ五十五

北山友松子曰予蚤歲受金匱於先師讀下利已差至其年月日時復發者以病不盡故也當下之宜大承氣湯之法乃疑世上豈有陳年之痢其年月日時數字恐是傳寫之誤焉茲甲寅七月中旬河州一富兒十三歲下利赤白諸治無驗求予用治脈滑因記得仲景曰下利脈反滑者當有所去下乃愈宜大承氣湯之言遂撮大承氣湯而與之一貼症減半二貼愈七八改用木香異功散收功次年乙卯七月忽患瀉利日十飲次又請予治脈之又滑因問其親曰令郎此症去秋始患耶親曰兒八歲時患瀉而後變痢下利至年月日時復發

服白朮散百餘日，纔得平安。厥後每年秋初必患痢疾，每發便服白朮散，經十餘日乃愈。去年之痢亦服白朮散，但不應焉。故請公下藥矣。予聞此言，恍如夏晝噴水，謹服仲景先生之神於醫也。因又與大承氣數貼，痢止。強與數貼，瀉下腸垢，碗計。后仍用異功散收功，而次年不再作矣。增廣醫方口訣卷上

金匱要略下利已差，至其年月日時復發者，以病不盡故也。當下之，宜大承氣湯。其法曰：日晡時服諸熱藥不效，宜先取去，然後調治，易差不可畏虛，以養病也。宜溫脾湯。

厚朴去麩皮 干姜炮 甘州桂心去皮 不附子

附子生去皮 臍各半兩 大黃生四錢 碎切湯一盞 漬半日 湯時 和淨下

右細剉，水二升半，煎八合，後下大黃汁，再煎六合，去滓，澄去脚，不要晚食，分三服溫服，自夜至曉，令盡，不快食，前更以干姜圓佐之。

乾姜圓 干姜炮 巴豆去心 炒大黃濕紙裹 煎上蒸

人參各一錢 右除巴豆餘為末，同研煉蜜圓

如梧子大，服前湯時，用湯吞下一圓，米飲亦得。有人因憂愁中傷食，結積在腹胃，故發吐利，自後至暑月稍傷，則發暴下，數日不已。王函云：下利至隔年月日，不期而發者，此為有積，宜下之，止用溫

脾湯尤佳如難取可佐以干姜圓後服白朮散

白朮散 白朮 木香 附子炮去

人參去芦各等分 右細末每服二錢水一盞生薑

三片棗一箇煎六分溫服以上並卷四

證治要訣瀉已愈隔年及後期復瀉古論云病有

期年而發者有積故也宜感應丸 卷八

感應丸 百草霜用庄村有柴木草燒 杏仁肥去

去雙仁一百四十箇別研 丁香 木香各半 川乾姜炮

肉豆蔻取霜二十箇 巴豆去壳焙八粒

右取百草霜杏仁巴豆另研餘四味共為末和勻

先將好黃蠟四兩溶化以重綿濾去渣更以好酒

一升於瓦器內煮蠟數滾傾出候酒冷其蠟自浮

於上春夏用油一兩秋冬用油一兩半熬令香熟

次下蠟同化乘稍熟和前藥末作塊油紙包收旋

丸如菜豆大每服五七丸或十丸或十五丸量大

小虛實加減丸數 證治要訣類方卷四引和劑

白帶下用白葵花白蜀葵花ナリハナアア  
オホアアフヒト云フ  
 有持桂里曰山田氏ノ處女年十八九白物ヲ下シ  
 テ不止其胸脇滿スルヲ以テ柴胡薑桂湯ヲ與レ  
 ドモ効ナシ因テ當歸四逆加吳茱萸湯勝執飲ノ  
 類ヲ投スレドモ皆不應最後ニ升陽燥濕湯ヲ用  
 ヒテ奇効ヲ得タリ方ハ約ヲ貴ヘドモ博ナラザ  
 レハアルヘカラス方輿輓卷二

內外傷辨神聖復氣湯婦人白帶陰戶中大痛牽  
 心而痛云云乾薑炮為末一錢三分柴胡剉如豆  
 大羌活剉已上各一錢甘草剉薑朮本已上各八分  
 升麻剉半夏湯洗已上各七分當歸身酒浸剉六  
 分白帶下用白葵花



分防風剉如豆大郁李仁湯浸去皮研如泥入藥  
 同煎人參已上各五分附子炮去皮臍二分白葵  
 花五朶去心紙剪入右件藥都作一服水五盞煎  
 至二盞云云卷中前後文甚長今畧載之不具錄  
 蘭室秘藏助陽湯一名升陽燥濕湯治白帶下陰  
 戶中痛空恐控心而急痛身黃皮緩身重如山陰  
 中如冰生黃芩橘皮已上各伍分防風高良薑乾  
 薑郁李仁甘草已上各壹錢柴胡壹錢參分白葵  
 花朶朶剉如麻豆大分作二服每服水二大盞  
 煎至一盞去粗食煎稍熱服卷中

白帶下用白葵並助陽湯

**內疝散** 附橘核丸

津田玄仙方內疝散治諸疝神效療治茶談六編

草菓 枳殼 大茴香 小茴香 宿砂

烏藥 檳榔子 童皮 甘草 沈香

木香 陳皮 橘核 荔枝核 川練子 各等分

右十五味細末用酒或鹽湯每服點服

其コノ方一大家ノ秘方ナリスベテ疝氣ノ諸疝

桂附ノ證ナキモノ廣ク用テヨシスベテユル

ク効ヲトラントスルモノ皆コレヲ用ベシコ

ノ方モ人ノハタラキシダイニテ如何トモ用

ヌベシ予ハ本方ニ吳茱萸ヲ加テ用

內疝散 附橘核丸

又予壯年ノコロ一疾アリ、其證朝飯ノ後、腹中エ  
グルガ如ク絞リイタミ、一時ハカリニメ、常ノ如  
クニナル、トリワケ霜ナドノ多クフルタル朝痛  
ムトキビシ、只コノ痛十年餘ヲヘテ治セス、其痛  
甚タシキ時ニハ、腹サハラニクタルト一二度ニ  
メ、腹痛モ亦フイテトツタルヤウニナヲル、外ニ  
一点疝氣ノ證トテモナケレバ、疝痛ナリトハ思  
ヒツカズ、只香砂平胃散カ、リノ治ヲナシテ歲  
月ヲオクル中、陰丸ノフトリヲ見テ、疝氣ノイタ  
ミナルトヲ知リテ、附子粳米湯ヲ用ユレ、氏サノ  
ミヨキ氏アシキトモ思ハレズ、因テ內疝散ヲ用

テ、只ヒトスゲニ疝ヲ治スルノ藥ヲ用ヒケレバ、  
十年餘ノ腹痛、四五十日ヲヘズシテ治シタリコ  
レニカギラス、スベテノ心腹痛、虫痛、胃腕痛ナド  
ノ如キ病人ニアイテ、疝氣ノ有無ヲ問ハズニ、藥  
ヲ施スハ、一ツノ手又ケナリ、同四編  
又今セケンノ人ヲ見ルニ、三四十ノコロヨリ、腹  
カフトリテ、鼓脹脹滿ノ病人ヲ見ルヤウニナレ  
氏、サノミ苦トモセズ、飲食ナドモ常ノ如クス、  
立居モスコヤカニテ、今日ヲスゴス、是一種ノ  
腹滿ナリ、コノ腹滿ヲ医者ニ問テ見ルニ、何ノ故  
ナルトヲシカト知ラヌ人多シ、予先年腹ノイ

サクナルヤウニシテモワレト、療治ヲタノミレ  
シコアリ、然ルニ、イカヤウナル藥ヲアタヘテヨ  
カラニヤ、心ニ一決セズ、幸ニ予ガ朋友ニ、古方家  
ノ醫者アリケルニ、コノ療治ノ主方ヲ相談ニ及ヒ  
ケルニ、醫者答テ、其病因痰ニテアルヤ、血ヨリ出  
テタルヤハ、某トテモ知ラズ、然レモ藥ニテ腹滿  
ハ治スベシト云フ、其方ヲトヘバ、厚朴湯ノ煎汁  
ヲ以テ、紫圓ヲアタヘ、毎月三四夕ビツ、ハモ、ノ  
セヨトノサシヅナリ、予モソレホドノコトハ心得  
テイルナリ、今少シ面白キ主方ハアルニイカト  
問ヘバ、右ノ主方ヲノケテハ、思ヒアタリナシト

云ヒケル、予其後思フニハ、コノ腹滿ハ、疝氣ヨリ  
出テタル腹滿ナラシ、其證據ニハ、周身元氣ノス  
コヤカナルト、腹滿ノ苦ニナラヌ、相違ノ処、是乃  
医書ニ云フテアル、病深メ、而居動不衰者、疝氣之  
候也ト云フニアヘリト、一決メ、内疝散ヲ法ノ如  
クセイシテ、一劑ヲアタヘ、示メ日久、酒ト色トヲ  
ウスクシテ、コノ藥ヲ半年バカリモ、毎日三夕グ  
ライツ、ノミレタナラバ、少シハ藥効アラント  
云テアタヘケル、後ニ其人來リテ、予ニカタリケ  
ルハ、藥ヲタベテヨリ、今日ニイタリ、九十六日ナ  
リ、然ルニ腹ノヘリタルコトカクノ如クナリトテ

腹ヲイダシテ見セケルニ、半分餘ヘリケル、コレ  
ヨリシテ世ニ多キ一種ノ腹滿ハ、酒色疝ノ三ツ  
ヨリ發スルヲサトリテ、治ヲ求ムル人ニアヘ  
ハ、必ズ酒色ヲイマシメテ、ゴノ丹疝散ヲ久服サ  
スルニ、相應ノ効ヲトラズト云フコトナシ、是予ガ  
經驗ノ一法ナリ、カクノ如キ平日ノ輕病ニサヘ、  
疝氣ヨリヲコルモノ多シ況ンヤ大病ノ水腫脹  
滿ニ、疝氣ヨリ發ル病人ハ、極メテ多クアルベキ  
ハズノ理ナルヲ予イヅレノ医者ノ水腫ヤ鼓脹  
ノ療治スルヲ見ルニ、一人トシテ疝氣ノ病因ヲ  
問ヒ及ボス人ヲ見ズ、是治療ノ大キナル事又ケ

ト云ベシ、同上

又予一人ヲ治タルコトアリ、其證夜中ニ精ヲモラ  
スコト十五六ノ時ヨリ、二十六ニナルマデ治セス、  
其精ヲトリワケ多クモラシタル翌日ハ、顔色モ  
アラサメテ、心モチアシクナル、然レモ、飲食元氣  
ナド、常ニカハルコトナシ、自汗盜汗ナドモナク、又  
タチハタラキモ、スコシモ衰ヘタルコトナレ、只ト  
リトメテシゴトニテモスレハ、早クタイクツシ  
テ、氣ヲフサグコトアルノミナリ、脈ハカアリ、先醫  
用コル外ノ方左ノ如シ、八味地黄丸、六味地黄丸、  
補中益氣湯、神仙巨勝子圓、歸脾湯、滋陰降火湯、龍

骨牡蠣湯建中湯ノ如キモノヲ用ル。二十六ノ  
其年マデ用ヒタリ。然レハ遺精ノ證ハスコシモ  
カワルコナクアシクモナラ子バヨクモナラズ  
コレニヨツテ予ガ藥ヲモトメケル予見テ思フ  
ニハ張子和ガ儒門事親ニ陰痿精滑白淫ハ皆男  
子ノ疝ナリ。妄リニ之ヲ腎虛ニ歸スベカラズト  
云リ。今コノ病人實ニ腎ガ虚ノ遺精アルナラハ  
自汗盜汗喘急潮熱等其外腎虛ノ諸證イテ今  
ゴロハ床ニツキ九死一生ノ大病トナルベキニ  
カクナ如ク元氣モ飲食モ立居モ常ノ如クニス  
コヤカナルハウタガハシキコト外ニ疝氣ノ證

トテハスコシモナケレバ病人病深而起居不衰  
ト云フ口訣ノ旨ニアヘバ疝氣ノ療治ヲシテ見  
ント心ツキレユヘ内疝散ヲ半劑バカリモ調合  
メコレヲ一日ニ三々ツ朝昼晩ト三度スキハ  
ラニムベシカクノ如クヲコタラス三月モ四  
月モバシテ見ラレヨ毒物ハ房事ト酒トノニツ  
ヲカタク守ルベシトツトクニ示レアタヘケル  
ニコノ藥相應メ四十日バカリノ中ニ大キニ効  
タチテ以上六十日ハカリヲ經テサツハリト治  
シタリ同上  
又子一人ヲ治セリ其證息ガツメタキコト氷ヲノ

ムゴトク思ハレテ、腹ノウチキミワルシ、或ハア  
ツキ湯ナドヲノミテ、息ガアタ、マルカト思ヘ  
ハサニテモナシ、火ヘ○火チカハナドニ火ヲタクサ  
ンニ入テ、火ノイキヲスイコメハ、今トメハ温  
リテ心ヨクヲボコレ也。又ホドナクモトノ如ク  
ニヒヘツナリ、故ニ子ル時ハ、ヨギヲカフツテ息  
ヲコメテイ子バ、眠ラレヌヲタビクアヲ、但レコ  
證、年ノ中ニ冬ニナルトヲコリ、夏ハナシ、飲食元  
氣ツ子ニカワラズ、予初ノホドハ、痰留飲ナドノ  
ワザナリト思ヒテ、精ダシテ痰藥ヲ用テ見レ也。  
サツハリ効ナシ、予ツタクハ、ホア○シ○ホア○ホア○コノ

息ノ冷ルニ三ツアリ、痰ヨリ發ル一ナリ、元陽虚  
脱ヨリ發ルニツナリ、疝氣ヨリ發ル三ツナリ、コ  
ノ三ツノ中ニテ、痰ヤ留飲ノ藥ヲ用テ効ナケレ  
ハ、元陽虚脱ノ證ニモアラジ、只疝氣ノ疝ヨリ發  
リタル證ナラント、醫案ヲ決シ、内疝散ヲウツラ  
ヌト用ユルウチ、イツヨクナル也、ナシニイヘタ  
リ、アル人予ニ問曰ク、疝氣ニテ息ノ冷ルノ理ア  
リヤ、答テ曰ク、ナキトニテアルヘカラス、其シサ  
イハ、寒疝トイフモノハ、何ノトモナク、寒氣ノ厥  
陰ニコリカタマル、是病因ナリ、然ルニ、今寒氣ノ  
時節ニアフテ、内ノ寒氣ガ、外ノ寒冷ノ呼吸ニツ

リタサレテ、兩寒相セニツテ息ヲ冷スノ理アラ  
シ、是疝藥ヲ用テシルシアルユエンノモ力カ又  
疝積ノ證ニ、齒カ冷テイタミ、或ハ頭ガ冷テ鳴ル  
ヲアリト云フ説ヤリ試ムベシ、何トモ息ノ冷ル  
ヲ疝トトルヲ味ベシ、同法ニモ息ノ冷ルヲ  
又練木村ノ藤四郎ト云フ人ノ妹、一病ヲ得タリ、  
産後二十餘日ヲ經テ、痔痛甚シク、且大便カタキ  
ヲ全ノ如クニ、痛苦イフニタヘズ、血モ亦大便  
ニ交リ下ルナリ、然レモ元氣ニハ一向ニサロリ  
ナシ、一醫産後トイフヲ以テ、補血潤劑用ヒズト  
云フトコロナシ、効ナキノミナラズ、ノ病勢反

テツノレリ、予ニ求ム、予コレヲ見ルニ、疝氣ノ證  
トテハ少シモナケレモ、已ニ補血潤劑硝黄ノ類  
ニテモ用テ効ナキウヘハ、轉スルニ疝氣ノ治ヲ  
スルヨリ外ナシト思ヒ、内疝散ニ大黄一味ヲ加  
ヘ用タレバ、ナンノヲモナク治シタリ、又一人常  
ニ痔ヲ持病ニモツ、諸治効ナシ、コレモ内疝散ヲ  
ナカク用テ、イツヨクナルモナク治シタリ、右ノ  
段西安木ヲ見テ、淋瀝痔血ノ四病、○四疑誤疝氣ヨリ發ル  
モノアルヲ知ルベシ、同上  
又予二十三ノ時ニ、腹痛ヲ患フ、其證朝飯湯ヲ飲  
ンテ後シキリニイタムコト半時バカリニメ治

ス、コノ腹痛ノ發ル、毎月八日モ九日モヲコル  
時モアリ、又二日三日バカリニテスム、モアリ、  
毎月ノヲコリアンバイ、ヲ、カタハ、コノトフリ  
ナリ、霜月時分ニナレバ、トリワケテ痛ニヒト  
ク發リモシゲシ、餘リヲコリノヒドキ時ハ、必ス  
泄瀉アリ、泄瀉スレハ、チキニナリテ、常ノヤウ  
ニナルナリ、皆アサメシ後スコシノウチノ痛ニ  
テ、四ツスギニヲコリタルハ、ハナシ、或ハ夜一ト  
子イリシテ、フト急ニイタム、ナトアレトモ、ソ  
レハ甚ニレナリナリ、コノ時ノ医案ニ、コレハ食  
積瀉ノルイナルベシト思ヒ、不換金正氣散ニ、消

導ノ藥ヲ加ヘテ用ユレ、ヨクモナラズ、ワルク  
モナラス、因テコレヲ知音ノ医ニ相談スレ、別シ  
テ医案モナシ、コノ腹痛二十年餘ヲヘテ治セス、  
又附子粳米湯ヲ用ヒタルコトアリ、建中湯ヲ用ヒ  
タルコトアリ、真个美食積湯ヲ用ヒタルコトアリ大建中湯ヲ用セタルコトアリ、烏梅丸  
ヲ用ヒタルコトアリ、椒梅湯ヲ用ヒタルコトアリ、紅  
丸ヲ用ヒタルコトアリ、大七氣湯ヲ用ヒタルコト  
アリ、七味清脾湯ヲ用ヒタルコトアリ、紫丸ヲ用ヒ  
タルコトアリ、右諸方ヲ用テモ、今月ヨキカトスレ  
ハ、來月ハ又アシクナルト云フヤウナルコトニテ、  
後ニハ服藥ヲヤメテ居タルコトシバラクノアイ



タナリトカクシテ居ルウチ、左ノ陰丸ガイツ大  
キクナルトモナシニフトリタリ、コノ時、始テ以  
前ノ腹痛ハ、疝氣ナリト云フヨ、又、タシカニ知レリ、  
コノ前トテモ、全ク疝痛ナルコトヲ心ヅカサルニ  
ハ非ズ、サレバコソ附子粳米湯ヲ用ヒタリ、然レ  
モ、タシカニ知ルト云フモノハ非ズ、タシカニ知  
レハ、右ノ如クイクラモ、方ヲトリカヘテ、医案  
ノ操ハクヅサマナリ、医案ノ操ヲクヅスガ、即知  
レモ、知ラヌ同前ノコトナリ、シカレバ、コノ腹痛ヲ  
疝ナリト心ニタシカニ知リタリトハ、陰丸ガフ  
トリタル一ツノ目的ヲエテカラ、タシカニハ知

知リタルコトナリ、サスレハ療治ニ目的ヲタテ、  
学ブコト、一、大肝要ノコトナルコトヲ知ルベシ、スベテ  
コノ目的ノコト、只コノ医療ノ上バカリニテアラ  
ズ、天地ノ間ニテモ、鳥カ水ヲアビレハ、明日ハ雨  
ノフランコトヲ知リ、朝虹ガフケバ、時ヲノハサズ  
雨フランコトヲ知ル、コノ外、船頭ガ風ヲ知リ、猫ノ  
目ニテ時ヲ知ル、皆目的ニテタシカニハ知ラル  
ルナリ、故ニ目的ナキ療治ハ、メクラツモリナレ  
バ、下手ナリ、予門人ニ、目的ノ学ヲ先務ニサスル  
モ、コレガ為ナリ、而右ノ如ク、タシカニ疝ナリト  
知ルウヘハ、治療ノ手段モ一決シ、前ニ用ヒタル

処ノ附子粳米湯ヲサ、イノコニカマロズ用ル  
心ニオチツイテ用ヒシ処ニ、ダンクト心ヨクハ  
ヲボユレト、ダ腹痛三四分ノコリテ治セズ、然  
ルニ、或日大便ニ坐スル時ナニカハ知ラズ、右ノ  
ヒザカシヲヨリ、足心ヘカケテ、熱キ居風炉ニイ  
リタル如ク思ハレテ、甚心アシカリシ故、大便ヨ  
リアガリテ、其熱処ヲ見ルニ、ナンノコモナク、平  
日ノ色ナリ、其翌日ニイタリテ、又右ノ手ノ中ノ  
指二本ガシビレテ、コレヲ熱湯ノ中ヘヒタシテ  
見ルニ、スコシモ熱ヲホヘズ、足モ又アツキバ  
カリテ、ナクシビレテ、少シ痒キキミアリ、コレヲ

カケバ、カサホロシノヤウノモノ出ツ、熱キ居風  
炉ニ入りテ、スコシモ熱ヒカ、又ルセカヲ知ラズ、  
カクノ如ク一年餘ヲヘテ治セズ、又陰丸ノフト  
リモ、コレマデノ三ザウ倍ニナリタリ、コノ證ド  
モガ出テ、以來、三十年ニ近キ腹痛ガ、フイテ取  
ツタルヤウニ治シタリ、コ、ニ至テ思フニハ、是  
粳米湯ヲ久服シタル附子ノ力、寒邪ヲ下部ヘ追  
テ、ゴノ證アリトサトリテ、桂枝加附子湯ノ煎汁  
ヲ以テ、内疝散ヲ服スルコト、今ニ至テヤマズ、諸證  
日ニ快氣ニヲモムケリ、是カクノ如キ種ニノ變  
證ニアフテモ、其目的ニサヘ熱スレバ、ス、ハ〇疑

種ノノ変ニイゾミテハ、種ノノ字ハソシニカヤウニモ、  
治ハハタラカル、モノナリ、初学ノ徒、コ、ニ心  
ヲ留ベキ処ノモノナリ、コレヲ以テ、疝氣ノ邪ガ  
手足ニナガル、時ハ、痛風トモ、脚氣麻痺トモ、緩  
弱トモ、痿痺足トモ、種ノノ證トナルコトヲ知ルベ  
シ、人ノステタル長病ナドニ、此證アラバ、疝氣ノ  
病案ユダンアルベカラズ、同上  
又予一人ヲ治セリ、其證疫熱退テ後、只耳鳴ノミ  
イヘズ、後ニハ頭モナリ、晝夜ヤムコトナシ、食ニム  
ラアリテ、ス、ム時ハ大食シ、ス、マ又時ハ一粒  
ロニ入レズ、大便通ゼザルコト十八九日通セズ、小

便ノ通ズルコト、毎日五升クライゾ、通ズ、初耳ノ  
鳴ニ理ヲツケ、陰火ノ上升ト思ヒ、加味四物湯ヲ  
用ヒ、又滋陰降火湯ヲ用テ効ナシ、因テ再ビ診ス  
ルニ及テ、ヤウスヲ聞クニ、陰丸ガシメリ痒フメ  
ナシギスルト云フ、因テ思フ、是全ク疝氣ナリ、耳  
鳴ハ疝ノ上升セルモノニメ、痰火ヲサシハサメ  
ルモノナリ、大便ノ秘スルハ、小便ノシゲキニシ  
ツツツツ疑ハヨ疑ハヨ脾約スルナリ、小便ノシゲキハ、寒邪  
膀胱ヲ約セザルニヨツテナリ、食ニムラアルハ、  
脾約スルガ故ナリ、畢竟疝邪ガ治スル時ハ、餘證  
ハ治セザレ、氏治セント思ヒ、乃桂枝加附子湯ノ

煎汁ヲ以テ内疝散ニ吳茱萸一味ヲ加ヘ用ヒテ、  
諸證ノロクイヘタリ、是疫熱ノ疝邪ヲサシハサ  
ミタル証ナリ、傷寒ニ疝邪ヲカヌル症モコレヲ  
ヲシテ知ベシ、同上

又予一婦人ヲ治ス、下血二十年イヘズ、諸方効ナ  
ク、治ヲ予ニ求ム、予コレヲ診スルニ、痰疝ノ證ナ  
リ、因テ家方痰疝ノ方ヲ用テ、痰疝イユ、又内疝散  
ヲ製メ、四物湯ニ桂枝附子ヲ加ヘタル煎方ニテ  
ノミシメテイユ、同上

### 附橘核丸

家君常ニ入門ノ橘核丸ヲ用テ奇効ヲ得ト語リ

玉ヘリ、余年十五六歳ノ時ユヘ、詳ナルヲ質問  
モセス、今ニ在テ貴憾ノ至リナリ、内疝散ノ方ヲ  
集ムルノ次、茲ニ附録メ、資攷ニ備ス、業廣私説

醫學入門、橘核丸、橘核、海藻、昆布、海帶、桃仁、川練  
各一兩、厚朴、玄胡索、枳實、桂心、木香、木通、各五錢、  
為末、酒糊丸、梧子大、每六十九、温酒塩湯任下、治  
四種癩疝、卵核腫脹、或成瘡癰潰爛、輕則時出黃  
水、如虛寒、加川烏、腫久不消、加礪砂少許、有熱氣  
滯、加黑丑、大黃、卷六四十三葉



求吾ハ端人ナリ、必ず我ヲ欺ズトイヘリ、愚南溟  
 氏ノコトバヲモクヒテ、猬皮一枚ヲ得テ二人ヲ  
 治ス、極テ功アリ、療治茶談續編附録、卷九  
 痔疾ニ猬皮ヲ用ル、方書中ニ載スルモ人勝  
 テ計フヘカラス、其中簡便ノ方ヲ鈔メ、試用ニ  
 備ヘント欲スレ、未暇、今唯一ニヲ鈔メ、其目  
 ヲ掲ク、他日ニニ整頓スヘシ、  
 千金方治痔猬皮丸、卷廿三十九  
 又猬皮丸、同上廿九  
 又治五痔方、同上廿九  
 又治肛出方、同卷廿四廿四  
 外台卷廿六引千金方

廣濟療五痔蝟皮散、外臺卷廿六

刪繁猪懸蹄青龍五生膏、同上九

廣濟黃耆丸、同上十

集驗療痔猬皮丸、同上十

古今錄驗療痔黃耆丸、同上十三

許仁則黃耆十味散、同上十五

肘後療痔下部痒痛如蟲齧、又方、同上十六

刪繁驚風丸、同上十八

本事方千金薰蟲痔方、卷五

又治腸痔在腹內有鼠爛下血方、同上三

又治痔有鼠乳結核作渴疼痛方、同上

又治腸痔瘻電甲圓同上

三因方蝟皮散卷二十七

又五灰散治五痔卷十五十一

又熏法同上

婦人良方蠶甲散治婦人五種痔疾卷八婦人痔瘻方論第十

三

福島慎獨軒曰內痔難愈者內有結毒也宜驅盡其毒蝟皮最效如痔漏亦然長服下劑可蕩盡其毒勿漫施外敷求速治先哲醫話卷下

蜘蛛絲治瘻

津田玄仙曰瘻ヲ治スルノ神法蜘蛛絲俗山蜘蛛

ト云フ夏月ニ絲ヲ引其尤大ナルヲ取テ絲ヲ瘻

ノ根ニマク大ナル瘻ハ二十日ノ間小ナル物ハ

七八日ヲ過ズ潰爛メヲツル予自三人ヲ試シ又

朋友ノ試驗ヲ見テ六人イヅレモ皆治スルヲ

得タリ是誰モ知タル方ナレド其効甚神ナル故

今爰ニ出タシテ初學子ニ示ス此方全ク俗間ニ出

タル妙藥ト思シガ后名醫類案ヲ見ルニ焦氏筆

乘ヲ引テ有人患此用蜘蛛絲纏七日消爛屢驗ト

云フ文ヲ見レバイヨク此方ノ妄ナラザルヲ信

蜘蛛絲治瘻

療治茶談卷一

蘇沈良方，繫瘡法。右取稻上花蜘蛛十餘箇，置桃李枝上，候垂絲下，取東邊者，撚為線，繫定瘡子。七日候換，瘡子自落。沈興宗待制家老姥，病瘡如掌，奉用此法，繫之。至三換，瘡子遂乾。一夜忽失所在。天明前，枕邊得之，如乾栗。卷九

名醫類案有人患此，用蜘蛛絲纏，七日消爛，屢驗。卷九 龐齋門引焦氏筆乘

養生丹治吐乳 附二氣丹

劉君廉夫曰：御藥局小吏兒生五箇月，吐乳日六次，無他證，唯面色青白，似稍疲倦。父母憂之，請理於予。予曰：此責在小方脈科。敢辭。渠曰：凡小方科，理吐乳，非錢氏白朮散、香砂六君子之屬，則涼膈散、紫圓之類，其變慢驚、慢脾者，比之皆是。願君別為處置，以救豚犬命也。懇請不已。予因撮一方，以與之。半夏為君，茯苓為臣，藿香、伏龍肝為佐，丁香為使。生姜為引，每帖一錢水煎。別以養生正丹為散，以挖耳頭挑散子入口中，兩麻子許，以煎藥汁送下。日五次，不決旬而吐止，神色復故。此予常用理翻胃方。籍以療吐乳，未



足為奇，然而啞科從不用此等藥，株守常套之劑，口  
其失殤果何心也。標陰文集卷下

附二氣散

良方一本作  
陰陽二勝散

小兒直訣二氣散治冷熱驚吐及胃一切吐利諸  
治不效者硫黃半兩研水銀貳錢半研不見星右  
每服壹匙至伍分生薑水調下或同炒結砂為圓

卷下

蘇沈良方治久患翻胃及小兒驚吐諸吐並醫田  
李散好硫黃半兩細研水銀一分與硫黃再研無  
星右同研如黑煤色每服三錢生薑四兩取汁酒  
一盞全姜汁煎熟調藥空心服衣被益覆當自足

指間汗出逆灑徧身汗出即差常

一本有人病  
作嘗

反胃食輒吐出午後即發經三年不差國醫如孫  
兆輩皆治療百端無驗消羸殆盡枯黑骨立有守  
庫卒李吉者見之曰此易治也一服藥可差始都  
不信之一日試令合藥與少錢市藥僕次日持藥  
至止一服如法服之汗出皆如膠腥穢不可近當  
日更不復吐遂差楚人田醫善治小兒諸吐亦用  
此藥量兒長少服一錢至一字冷水調下吐立定  
此散浮難調須先滴少水以至緩一研殺稍稍增  
湯使令調和若頓入湯酒盡浮泛不可服



面者矣トモアリテ、何レモ人ノ離レ叛クコニテ、  
倭語ニ見限ラル、ト云ナドノ毎ニテ、刳割ノコ  
ヲ解體ト云コハ、絶テナキナリ、マタシモ、體解新  
書ト名付ケハ、可ナルベシ、其記ハ、史記始皇紀ニ、  
燕太子丹、患秦兵至國、恐使判軻刺秦王、秦王覺之、  
體解軻以徇トアリ、然レハムリナカラモ、體解ト  
云ハ、假リテ刳割ノ義、凡ナルヘシト話サレキ、一  
時坐談苟且ノ說ナレト、姑ク附記メ、先生ノ博覽  
強記ナルヲ示スト云、敗敵録  
顏氏家訓、慕賢篇、解律明月、齊朝折衝之臣、無罪  
被誅、將士解體、周人始有吞齊之志、

郭象、莊子齊物論、嗒焉似喪其耦、注、嗒焉而解體、  
若失其配匹者也、玄英疏、嗒焉、墮體、身心俱遺、物  
我兼忘、故若喪其匹耦也、

杜預、左傳襄廿七年、折俎、注、折俎、體解節折、升之  
於俎、

用敗毒散治案

井上玄徹若キ時藥ヲ懷中シ療治セラレシ比始  
テ細川家ノ奥方ニユカリノ人有テ肥後守忠利  
ノ婦妾産後血暈ノ病ト成テ人參ヲ引テ用ルヒタシ  
ク醫藥ノ事尽タル如クナルトキニ玄徹見セ  
タリ其病根居風呂ニ入テ上リシヨリ斯ノ如ク  
ナルト聞テ藥ヲ調合シ人參ヲ引テタニ帖ニ  
テ快氣ナリシ是ヨリ名醫ノ名ヲ得ラレシトカ  
ヤ後年諸門弟ヲ導クトテ此事ヲ申出サレ病婦  
風呂上リナク〇十ク血暈ノ療治良醫ノ手ヲ  
盡シタル所ヲ我風邪ノ療治セント思ヒ敗毒散  
用敗毒散治案

二人參ヲ引テ用ヒシニ、忽大驗アリキ、各此配劑ヲ諸醫ノ見知リタラシニハ、ヨモ用ヒ間敷ト思ヒ、藥銘ヲハ隨分ニ秘シタリシト申ス、道三流ノ内、玄徹門ニテハ、別メ藥銘ヲ他ニ知ラセサルト多シ、明良洪範卷廿二

婦人良方、僕嘗治一婦人、但惡寒、別無他證、六脉平靜、遂用敗毒散而安、此藥能去表中風邪故也、經云、惡寒家慎不可過當覆衣被、及近火氣寒熱相薄、脉道沈伏、愈令病人寒不可過、但去被撤火、兼以和表之藥、自然不惡寒矣、卷六

用規畫書

皇朝之米可與人參比

道三翁曰、日本人ハ水田ノ油ヲカキ、稻ヲクラヒ、又大豆ヲ味噌ニシテ食ヒ、又海魚ノ美ナルヲ食ヘバ、不斷人參湯ヲノムガ如シ、雖知苦庵養生物語

古林見宜常ノ詞ニ、人參ハ人ヲ助クルノ最

又毒ト成害ヲナスヲモ早シ、日本ト唐ト、人ノ生質違ヒ、第一米穀、日本ノ如キ宜シキ米ナシ、サレハ病人食事ダニ進ミナハ、外ニ藥カモ入ヘカラ

ス、日本ノ人參ハ米ニ、然ハ人參ヲ用ル病人多クハナキモノニ、大名豪家ハ、大事ニノミ思ヒ、命門

ノ君火、沢山ニ所持アル人ニ、人參ヲ用ヒ過セハ、皇朝之米可與人參比



難波經恭曰、妊娠泄瀉多由飲食失節、損穀則止。若傷食者、審其因施治。脾胃虛損者、理中湯加減。方度宜用之。母氣不足、下利口燥、舌上赤爛、生白點、飲食無味、手足煩熱、或前陰生瘡、痒不可忍者、屬血虛。甚者、殞胎。知藥八味丸主之。產後下利不止、虛極者、白頭翁加甘草阿膠湯。乾地黄湯。腹痛虛冷下利者、千金阿膠圓。或赤石脂圓等。胎產新書卷二

天保ノ頃、一婦人産後水腫、時ニ下利ス。余診メ、補劑ニテモ與ヘント思ヒシカド、幸龍野龍貞近邊ナレバ託スヘントテ、診ヲ乞タレハ、白頭

翁加甘草阿膠湯ヲ投ス、コノ人ハ新論ヲ著セシノ人子ニテモアラ

シカニ代目ノ人ニテ、余一月ヲ出デシテ全快モ時ニ面會シタリ、シタリ、コレ等ニテ攷ルニ、醫宗金鑑ニ、金匱本條ヲ注シテ、此條文義證藥不合、不釋、トイヘルハ、文字上ニ就テ説ヲ建タルモノニテ、經驗ハセザリシモノト見ヘタリ。

渴有屬蛇者 本集第五卷當參看

津田玄仙曰、一種虫證ノ渴アリ、渴トハ、ノドノカ  
ワク、ナリ、ゴノ證、冷熱ノイトヒナク、カワキテ、  
白虎湯ナドノ乾キト、ギル、モノナリ、大キニ  
療治ノ手ナカ、イアル、ナレバ、能ク前ノ虫證ヲ  
問ヒ、方ヲ考合セテ、其證ヲ決スベシ、但シ、コノ虫  
渴ニハ、舌ニ心ヲツケテ見ベシ、コノ見ヤウハ、舌  
診ノ條ニ出ス、併セ見ルベシ、主方ハ、七味清脾湯  
ニ、莪朮三稜百部ヲ加用ベシ、蛔虫ヲ吐カ下スナ  
ラバ、前方ニテ、紅丸子カ、烏梅丸ヲ用ユ、虫癖アラ  
ハ、大七氣湯ヨシ、熱アラバ、柴平湯、淨府湯ヨシ、  
渴有屬蛇者



茶談卷三

又曰諸病舌ニ皮ナキガ如クニシテ赤久潤ヒナ  
クヒバワレル舌アリ此舌アル病人大ニ渴シテ  
熱湯ヲ好ムモノナリ是多クハ虚舌ナリ大熱ア  
リトモ先ツハ涼藥ハ斟酌スベシ同上  
又曰一種虫證ニテ右ノ舌アリ此症ニモ大ニ渴  
シテ熱湯ヲ好ムハカリナキモノナリコノ二  
種ノ舌ヲ能ク見ワクルヤウニ心カケヘシ但シ  
病人ノ様子ヲ詳ニ問ヘバ大ガイワカルモノナ  
リ同上

先哲醫話序附釋文

先哲醫話序附釋文

序

予既序皇國名醫傳一書而知扶桑國裏  
亦有杏林若木華中豈無橘井宜乎視祖  
州為仙島而化海嶠作神山也然祇詳其  
姓氏里居師徒授受與夫活國活人之事  
而於孫思邈龍宮秘訣未勒成篇抱樸子  
金匱神方未纂入冊徒令後之人流連往  
昔景仰遺徽有華陀不在之歎焉今年夏

先哲醫話序附釋文

月令文公行交水州  
頭之海味甚前  
水不露頭  
世未試月令本

業廣按月令季  
冬水澤腹堅此澤  
腹之堅者蓋借  
月令文以形容水脹  
也

季幕中西席施君邦孚因不習水土薰失  
調攝陡患癥漲勢已增劇遂延淺田君來  
視察脈投劑不三四服而澤腹之堅頓如  
桶底之脫病遂霍然始知扁鵲未齊治膝  
理之甚易太倉在漢解顛腦而何難真三  
折肱而九折臂矣日者復携先哲醫話一  
書來求序於予翻閱數過見某氏治某病  
察某候用某藥議論精卓剖晰詳明醫固

井井而有條事亦鑿々之可據乃知太上  
玉經之說猶傳諸王君隱仙靈寶之方堪  
師夫祿里則是書之成洵後學之津梁醫  
家之圭臬也因誌數言於簡端云

大清光緒四年戊寅仲冬

欽差大臣四明張斯桂撰并書

杏林 神仙傳董奉居山不種田日為人治病亦不取錢重病愈者使栽杏五株輕者一株如此數年計得十萬餘株鬱然成林

若木

離騷折若木以拂日兮聊道遠以相羊

張協安石榴賦晞絳絲于扶業接朱光于若木

江淹詩若木出海外本自丹水陰

橘井

神仙傳蘇仙翁白母曰其受命當仙被召有期

母曰汝去之後使我如何存活先生曰明年天下疫疫庭中井水簷邊橘樹可以代養井水一升橘

葉一枚可療一人

祖洲

十洲記東海祖洲上有不死之草生瓊田中或

名為養神芝

海嶠

孟浩然詩緬懷赤城標更勝臨海嶠

李白詩犀峰迤海嶠千里黛相連

太上玉經

宋史藝文志梁丘子注黃庭內景玉經一卷

道藏中收錄上黃庭內景玉經外景玉經各

一卷道藏見彙刊書目

二月廿九日

拜啓 明々方以時  
多故 以時 生山 田先生 祐  
情 有 在 以 以 向 後  
件 以 以 以 以 以 以  
載 以 以 以 以 以 以  
以 以 以 以 以 以  
以 以 以 以 以 以

張 却 程 序 文 順  
區 上 年

當歸荆芥散

舉卿古拜散

本集卷十三

頭醫抄、當歸荆芥散、産後ノ中風ノ事ヲサトラス、

エシノハキ手足十ヘスクムヲ治ス、當歸荆芥穂

各等分、右細末メ、每服ニ変水一盞、酒少入テ七分

ニ煎メ温服ス、若口禁シタラハ、コケアケテ

ケ、口開カハ、急キ與テ服セヨ、甚効アリ、卷十四婦人

水原三折曰、産後項背強直者、用葛根湯加荆芥、殊

効、産育全書試驗方、本方直指方、達

清川吉人曰、澤玄英曾云、産後纒ニ挽メ三四日、忽

中風、手足不遂、言語澁滯、精神恍惚等ノ症ニハ、玉

當歸荆芥散 舉卿古拜散

機微義ノ當歸荆芥酒煎ノ方妙也。ソノ平生ノ酒  
量ノ大小ニ從ヒ、微醉スル程ニセサレハ効ナシ、  
但服藥ノ後少時煩悶スレバ妨トセス奇効アリ、  
適小倉内蔵之介君用人荒川清右衛門妻産後惡  
露不下、腹痛煩悶、忽中風不語不遂、精神昏憤、因テ  
余ヲ迎テ、即玄英ノ言ヲ試シト思ヒ、法ノ如ク與  
テ果テ暫時狂ノ如シ、此婦モト酒ヲ飲ズ、醉テ面  
色朱ノ如シ、彌灌キ與ヘシニ、一方ニテ數日ナラ  
ズ復故ス、瘀血モ漸下リ、健ニ肥タケタリ、按スル  
ニ婦人大全方ニモ此方アリ、經驗良方ニハ愈風  
散ト名ク、即千古名ハ舉卿古拜散、即於此方加當

歸者也、舉卿古拜、即荆芥之隱名也トアリ、按ニ名  
醫類按ニ益用韻之切語、舉卿為荆、古拜為芥云、  
永類鈔方、技萃方、徐氏胎產方、得効方等、ソノ外諸  
書並ニ玉機微義載スルト同シ、カクマテ奇効ア  
ル方トハ思サリキ、右書中看過セシコソ遺恨ナ  
レ、古人ノ方ノ妙ナルヲ知ヘシ、偶香祖筆記ヲ閱  
スルニ、治血崩、當歸荆芥各二兩、酒一鐘、煎服立止  
トアリ、全ク此方ト同シ、梧陰雜記卷三

勿誤藥室方函口訣批評

茵陳散

三初

聖惠方卷十二載ルトコロヲ以テ

原トナスヘシ

方函聖濟ヲ引ク改ムベシ

葳蕤湯

四ウ

余カ葳本ノ漫遊雜記ニ、コノ方ナ

古シ、萎蕤解毒湯トイヘル方アリ

葳蕤黃連黃芩

煨苓

甘草

ハ舊板ニアルヤ、查攷スベシ

補腎湯

九ノ十

方函ニ、捧心方ヲ引ケ凡、原ハ三

因方卷七ニ出タル方ナリ、但主治藥味少シク

異ナリ

治婦人經水不通云云方三ノサ王永甫カ惠濟方

ノ説ヲ載セタレ凡、雞峯方卷十七瞿麥元ノ主

勿誤藥室方函口訣批評

Blank page with faint bleed-through text from the reverse side.

治ニ説キタルヲ以テ原トナスヘシ

甘草黃連石羔湯十一切コレハ本事方ノ鵲

石散ナルヲ有持桂里イヘリ又石膏甘草ノ二

味ヲ用タルヲ外臺ニ多クアリ詳ナルヲ拙著

管錐本集第一卷外集第五卷ニ輯メ置タレ

ハ參考スヘシ

古人淡飲ノヲ膽寒ト云温膽湯飲ヲ寒ト

云フ仲景屢イヘリ此膽ノ字恐ハ衍

九味栝樹湯ニウサ原南陽ノ方ナリ只枳實ヲ

去リ甘草ヲ加ヘタルニテナリシカルニ家方

ト称スルハイカ、アラン

後

陳修園ハ知母ヲ加テ去水ノ聖藥トスニノサハオ

細辛コノ加味アリ面白シトモ思ハレズ

コレ等ノコトハ其人ノ妙ニ存スルナリ

朝川善庵終身此一方ニテ喘息ヲ防クト云サセ

湯麻黃 余弱冠ノ頃朝川翁ニコノ咄シ聞

ケリサレド一時ヲ凌クニテノコニテ畢竟根

治ニハアラズ余ガ知レル人ニモ麻杏甘石ヲ持

藥ニシタレトコレモ一時ヲ凌クノミシ

逆挽湯ニノサ桂枝名高キ方ナレト今ハ用ユ

ルモノ四ナリ

浮萍湯ニウサ丹溪心法類集ヲ引ベシ

侯氏黑散マニノ 余壯年ノ頃、一病人頭痛強久晝  
 夜呻吟シタルニ、一日忽然言語スルヲ能ハス、  
 執候ハナク、精神錯乱シタルニモナシ、其苦ム  
 トコロヲ問ヘハ、唯頭ヲタ、クノミナリ、一醫  
 癩ニトナシテ、龍膽湯ヲ用タレ、其効ナシ、余コ  
 ノ方ヲ處シタルニ、四五日ニメ語ルヲ得、頭  
 痛モ漸ニ愈タリ、コノ事ヲ辻元翁ニ吡シタレ  
 直ハ、甚感心セラレ、其後土屋侯ノ令愛ヲ、コノ方  
 ニテ治シタリトテ、礼ヲ申越サレタリ、フノ頃  
 翁ハ六十餘ニテ、海内ノ大家、余ハ乳臭ニテノ  
 中翁ノ挾ムコトナキヲ感服シタルヲアリ、  
自書生

柴梗半夏湯十三ノ コノ方ハ、醫學入門卷八ニ出

タル方ナリ、但大棗生姜ナリ、

柴胡三白湯十三ノ コレハ、傷寒蘊要近代名醫加

減ノ法中ニ出タル、參胡三白湯ナリ、

翹玄湯十九ノ コノ方五香連翹湯ノ瘰癧ヲ治ス

ルヨリ出タル方ナリ、說拙著管錐本集第三卷、

同外集第二卷ニ載ス、

生姜瀉心湯十三ノ 余五瀉心殊別論アリ、拙著經

方辨ニ載タレハ、茲ニ贅セス、

七氣湯三ノ 方函コノ次ニ、神秘湯アリ、コ、

ニ其目ナシ、疑ハ口訣モ亦脱ス、



葛根ヲ陽明ノ藥トスル一古意ニ非ズ三ノ廿六オ

湯古意ニ非ルハ、先輩往ニイヘリ、余ヲ以

テコレヲ觀ルニ、宋元以下ノ說トモイヒ難シ

至千金外臺ヲ讀テ、仲景ソ用ヒクワイト異ナル

コトヲ味フヘシ、金匱ノ奔豚湯ノ葛根モ、傷寒論

ノ葛根トハ異ナルヤウナリ

友人淺田栗園、其流行海内無比、頃日門人方

函ヲ編シ、附スルニ口訣ヲ以テス、余讀テ其

治療人ノ意表ニ出ルコトヲ感シヌ、然レモ其

人多端一二疑フ、沙ナキコト能ハス、乃其一二

ヲ評シ、他日栗園ニ質セント欲ス、

方函病門ヲ建テ、其方ヲ載セテ、然後國字

ヲ以テ分類スレハ、簡便ナリ、世間今普通ニ用ル

方、彙ノ如ナレハ、可ナルニ近シ、今二書書トモ

ニ、國字ニテ搜索ニ便ナレバ、甚苟且頗ル

體裁ヲ失フニ似タリ、

傷寒論ハ神醫ノ著スルコトナレハ先哲モ論語  
 ニ比シタル位ニテ固ヨリ温疫論ト比スヘキニ  
 ハアラザレバ吳氏淨氣ヲ用ユルノ妙處ヲ得タ  
 ルヨリ自ラ金科玉條トナシ首ヨリ尾ニ到ル  
 テ間然スルヲナシト思ヘルハ大ナル謬トシ余  
 ガ弱冠ノ頃マデハ膜原ノ説ヲ主張シテ産原飲  
 ヲ好テ用タル老醫モ往ニアリテ柴胡ヲ用ル  
 鮮キヲモリタレバ今ハ達原飲ヲ用ル人ハ甚  
 稀ナリ邪口鼻ヨリ入ルト云ハコノ書ニ始ル  
 ニアラス諸書ニアルトハ桂山先生ノ醫膏臍ニ詳

總論

辨温疫論 明治十二年三月六日

傷寒論ハ神醫ノ著スルコトナレハ先哲モ論語

ニ比シタル位ニテ固ヨリ温疫論ト比スヘキニ

ハアラザレバ吳氏淨氣ヲ用ユルノ妙處ヲ得タ

ルヨリ自ラ金科玉條トナシ首ヨリ尾ニ到ル

テ間然スルヲナシト思ヘルハ大ナル謬トシ余

ガ弱冠ノ頃マデハ膜原ノ説ヲ主張シテ産原飲

ヲ好テ用タル老醫モ往ニアリテ柴胡ヲ用ル

鮮キヲモリタレバ今ハ達原飲ヲ用ル人ハ甚

稀ナリ邪口鼻ヨリ入ルト云ハコノ書ニ始ル

ニアラス諸書ニアルトハ桂山先生ノ醫膏臍ニ詳

辨温疫論

●凡ソ方書ヲ讀ムル心  
 得方虚心ニ至ルニ  
 テ其人ノ美ハ勿論  
 其癖ヲモ知ラザレバ  
 往ニ其六果而居ニ陷

ル下リ、所謂好而知其惡、而知其美者、天下鮮シイヘ、理ナリ、

ニ載タルハ參攷スヘシ。温疫ハ別ニ一種ノ異氣ニテ、傷寒トハ絶テ異心ト云凡、温疫モ傷寒中ノ一種シ、五十八難ニ傷寒有幾ト問ヒタルハ、傷寒有五ト答フ、其五ツハ、中風、傷寒、濕温、熱病、温病ト云、ソノ五ツヲ総テ傷寒ト云ナリ、傷寒論ニ太陽病發熱而渴、不惡寒者、為温病トアルモ、人即吳氏ノ温疫ニテ、小柴胡湯ヲ用ル場合ナリ、別ニ達原飲ヲ設ルハ、教員ナリ、又達原飲ハ、尤味清脾湯ノ類方ニテ、瘡ニ用ユル意ヲ假リタルナリ、膜原ト云ハ、素問ノ瘡論ニ出タル字面ナルヲ引キ付テ、半表半裏ノ場所トナシタル凡、畢竟柴胡ノ半表半

○廿六吳氏達原飲ノ意ト曰ナリ

裏ト異ナルトナシ、サレハ柴胡ヲ用レハ、達原飲ハナクテモ事ハ欠ヌナリ、柴胡モ表裏分傳ヲ見合セルヤウノ意味ハ、引レテ、オモニ表ハ引出ス方ナリ、故ニ經文ニ凡柴胡湯病證而下之、若柴胡證不罷者、復與柴胡湯、必蒸ニ而振、却發熱汗出而解、又先宜小柴胡湯以解外、後以柴胡加芒消湯主之、又陽明病、脇下鞅滿、不大便而嘔、舌上白胎者、可與小柴胡湯、上焦得通、津液得下、胃氣因和、身濈然汗出而解也、又外不解、病過十日、脉續浮者、與小柴胡湯、肘後方傷寒ヲ論メ、三日已上至七八日不解者、可服小柴胡湯、其方後ニ微覆、取汗半日、須臾便

差是皆表へ傳ルノ證ヲ云ナリ。微シク裏ニ傳レ  
ハ柴胡加芒消湯、大柴胡湯ヲ用ヘシ。即吳氏三消  
飲ヲ用ル場合ナリ。滋陰ヲ喜テ用ル下後ノミ  
ナラス。柴胡養榮湯、柴胡清燥湯等ハ柴物湯  
ノ類方。其他モ大抵四物湯ヲ合シタル方多シ。桂  
麻苧連梔柏ハ大癩ナレハ用ルコト少シ。補陽モ先  
嫌ヒナレハ真武理中ノ類ヲ用ルコト絶テナシ。仲  
景ノ方ハ滋陰甚少ケレハ今ニアツテハ吳氏ノ  
方ヲ以テ其遺ヲ補フヘシ。切吳氏ニ仲景ノ方ヲ  
用ルコトモ全方ヲ用ルコトナシ。五苓散ノ桂枝ヲ去  
リ、猪苓湯ノ茯苓阿膠ヲ去ノ類。勝テ計ヘカラス。

就中茵陳蒿湯ノ分量ヲ三味トモ倒置シタル  
ハ仲景精義ノ存スル所ヲ玩味セサルヨリノ謬  
ナリ。安神養血湯ハ歸脾湯ノ類方ナレハ參耆  
用ヒニクキ疰ニハ効アルコトアリ。享和中原南陽  
醫事小言ヲ著シテ温疫論ノ文ヲ和解シテ載タ  
ルハ、高手ノ手際ニハ拙キ趣向ナリ。家君ノ療治  
シ玉ヘル頃ハ、疰氣ノ疰多カリシト吐シ玉ヘハ、  
余カ三四十歳ノ頃ヨリハ、道守赤各半湯并陽散火  
湯復元湯ナドノ疰多ケレハ、傷寒六書モ讀マ  
ザレハ、今ノ疫ヲ治スルニ事足テヌナリ。畢竟ノ  
処、傷寒論ヲ本尊トナシテ、後世ノ書ヲ羽翼ト

定テ戰爭モ盛テ

スルカ醫國家ノ專務ナリ

吳氏ノ頃疫ノ劇志流行シタルハ明ノ末清ノ起ラントスル時ナレバ氣運ノ然ラシムルトコロニテ此ノ如クアリシト見ヘタリ西塘感證篇ニ見今世甚少太陽證下アルモノ是也又費啓泰ノ痘ヲ療スル大抵攷劇ノミナルト救偏瑣言ヲ觀テ知ルヘシ費氏ハ天啓ノ著吳氏ハ崇禎ノ著ナレバ同時位ノ人ナレバ疫痘トモ病勢肆厲ナルト見ヘタリ

痘病燥濕辨 本集第十六卷當參看

痘病ノ因ハ素問至真要大論病機十九條ノ中ニ諸痘項強皆屬於濕トアルニ據レルニヤ甲乙經病源千金等皆寒濕ニ感ストナス成無己傷寒論痘濕暘篇ヲ注スルモ亦其說ヲ主トス尔後注家皆異論アルトナシ陳無擇ノ三因方注機ノ醫學原理張介賓ノ景岳全書等始テ筋脉滋養ヲ失フトナセシヨリ柯琴ニ至リテ確然燥志ヲ以テコレヲ斷ジシテ後從前寒濕ノ說全ク廢シ筋脈ノ燥クヨリ痘ヲ發スルコトニナリタリ余ヲ以テコレヲ觀ルニ病機十九條ニ諸暴強直皆屬於痘病燥濕辨

所謂風以乾之  
義ナリ

風トイヘルモノ却テ痙病ノ因トナスヘシ風筋  
脈へ入ルユハ筋脈燥テ變テ急スルナリ都テ天地  
間萬物ノ燥ク皆風ニ因ルサレハ風ヲ本トナシ  
燥ハ弟ニ義ニ落ッヘキ歎ト思ハル若果メ血液  
枯燥矣以テ病因トナサハ地黃當歸ノ類緩慢ノ  
藥品ニテ事足ヌベキニ風ノ入リタルユハ輕キ  
ハ桂枝葛根重キハ厚氣ノ類ニテ急卒ニ風ヲ去  
ルノ趣向ヲナセシナリ一概ニ燥トナシ決スル  
ハ猶一層ヲ隔ツルニ似タリ

因ハ系問ニ真要大論論熱十六卷ノ中ニ  
載ル

### 神授丸

紫芝園曼筆云岡崎士人河野通親者好醫方有二  
男一女其長子病勞瘵而死次子又疾醫治不效再  
冉羸備河野謂醫東城子曰吾兒疾甚萬無生理惟  
方書有取癆蟲方而今人莫取用之予今欲為吾兒  
行之死者命也予徒盡術而已東城子曰可也河野  
乃用虞天民醫學正傳所載神授丸与服二日下蟲  
形如穀蟲人或以為不死然羸備之甚元氣不支遂  
死蓋晚也無何少女又疾時年十四咳嗽累月不已  
癆證粗具河野試与神授丸二日下蟲時冬寒甚且  
調補以保元氣明年二月又用前方取蟲如法數日  
神授丸

業精者嘗于虫疔  
 咳嗽甚之者二  
 千金當歸湯ヲ用  
 ヒテ功ヲ救ルヲア  
 ヲ傳屍病ニモ亦  
 可ナラント思ヘモ未  
 タ試ミズ他日ヲ俟  
 ツ

下蟲五六合及小石如蕎麥大者十六枚鐵椎擊之  
 而不碎蓋蟲所啣骨節也後用補脾之劑而愈惜也  
 向使二子者早服此方則不死矣東城子者岡崎侯  
 侍醫其子伯通記其事以告人云卷八  
 無名氏日記云醫國學正傳の神授湯とて傳屍病を  
 治す法江守研曰是ハ石人ノ口にありし永年  
 原南陽曰太宰春臺ノ真珠丸ニ恐クハ神授効ア  
 ルヲヲ説ハ似タルモノヲ治シタルナルヘシ今  
 之ヲ用ユルニ下利下重スルヲ甚ク久大ニ用ヒ  
 惡シ醫事小言卷四上八  
 醫國學正傳神授散此方得之於河南部王府濟世

既久功不可述也川椒二升擇去開目者與梗畧  
 炒出干右一味為細末每服二錢空心米湯送下  
 或用酒米糊為丸如梧桐子大每服三十九丸漸  
 加至八九十九空心酒下或米湯下凡人得傳屍  
 勞病氣血未甚虛損元氣未盡脫絕者不須多方  
 服食但能早用此藥無有不愈者真濟世之寶也  
 ○愚嘗治一婦人用花椒二分苦練根一分丸服  
 屍虫盡從大便泄出卷三

下蓋五六合及...  
 而不...  
 向使...  
 何長...  
 〇...  
 治...  
 原...  
 此...  
 之...  
 惡...  
 〇...

時還讀我書續錄云余嘗之男子傷寒稍日引天譫語面赤脉緊

當歸四逆湯

先友清人吉人曰四逆散當歸四逆湯對待方

十人一少陰傳經ノ熱邪ニテ邪經中ニ鬱シ出

ルノ能ハス種ニ疑似ノ證ヲ現ス一ハ厥陰傳經

ノ寒邪ニテ邪經中ニ鬱シ脉微等ノ證ヲ現ス並

ニ邪ヲシテ出路アラシムルノ方ニテ病深ク裏

ニアルモノヲ治スベキニアラス嘗テ一度病ア

リ門人ヲメ代診セシム一人ハ大柴胡湯ヲ處ス

一人ハ復元湯ヲ處ス吾當歸四逆加吳茱萸生薑湯

ヲ與ルニ神驗アリ注家方證ノ疑シキヲ觀テ揆

入ナド云フハ大ナル謬ナリ

當歸四逆湯

數ニカカク微下  
 利肌熱等ノ元  
 陰陽相半セシ  
 今連參湯ヲ用テ  
 效ヲ見ザリシヲ木  
 挽町ニ住セル小河雄齋  
 トイヘテ來テ當歸  
 四逆湯ヲ與ヘテニ  
 快愈ナシト雄齋  
 モ郷向ニ時疫ヲ患  
 シ片柴田芸菴ノ  
 此方ニテ治シタリト  
 仲景ノ方ハ精思熟  
 驗スル片ハ自言外  
 ノ妙ヲ得ルニシテ  
 芸菴ハ丸山代淵ノ  
 弟ニテ兄弟ニ文





淺田栗園曰嘉永四年辛亥十一月御書院番清野助右衛門女年十九傷寒ヲ患ヒ尼寄段曾負高井玄益之ヲ療スル十餘日精神恍惚舌上胎ナクノ乾燥シ絶食五六日四肢微冷脈沈細其腹ヲ按スル心下ヨリ臍傍ノ左邊ニ至リ拘急シ重ク按セバ痛ヲルカ如ク血氣枯燥宛モ死人ノ如シ余兩陰久寒ノ證トシ當帰四逆加吳茱萸生薑附子湯ヲ與フ服スル一日夜心下大緩ニ始テ粥飲ヲ啜ル三日ニ精神明了シ終始一方ヲ服メ其人全愈玄益他日余ニ會メ此治法ヲ從心通ス余笑曰是即時還讀我書小川雄齋ノ按ニ本ツクモノナリ別ニ發明アルニ非ス然レモ古方ノ妙思議スヘカラザルト如此ト云橋黃年譜

飲食偏嗜 畏惡

北山醫話人情相同而好惡稍異至飲食之偏嗜自天淵矣文王嗜菖獸武王嗜鮑魚曾哲嗜羊棗屈到嗜芟吳王僚嗜魚炙王莽嗜鯁魚王右軍嗜牛心宋明帝嗜蜜漬鮓鮓齊宣帝嗜起麩餅鴨臠陳後主嗜鱸魚齊蕭穎叟白肉鱠崔鉉嗜新捻頭魏徵嗜醋芹陸鴻漸嗜茶楊大真嗜荔枝後魏辛紹先嗜羊肝顧翔母嗜雕胡飯范至能嗜青梅至若劉邕嗜瘡痂鮮于叔明嗜臭蟲張懷肅嗜人精權長孺嗜八甲周臨安尉薛震嗜人肉趙輝嗜女人月水劉俊嗜蚯蚓極矣若酒亦然能飲者斗斛不亂不能飲者濡唇即

飲食偏嗜 畏惡

聲

昏沈余初不好煙草及退耕北山閒寂時一吸焉至  
今三四年煙管不釋手非益露酷烈者不厭矣蓋如  
曹操噉野葛久而不覺其毒耳卷中

又好潔已謂之病則如杜預傳癖王濟馬癖和嶠錢  
癖李澄田地癖王福時與兒癖楊敬之愛土癖陸羽  
茶玩癖亦謂之病可也宋趙崇絢雞肋云南史梁王  
蕭譽尤惡見婦人相去數步遙聞其臭經御婦人之  
衣不復更著魏明帝好植穀金穀亦自好惡之偏耳

同上

紫芝園漫筆人之食性不同如其面焉然衆所嗜而  
獨不嗜衆所不嗜而獨嗜之者又性之偏也昔人有

嗜瓜甲嗜瘡痂者人性也已其於飲食所嗜所惡異  
於衆者非偏性則癖疾也丈夫固有之而婦女尤多  
云卷七

南嶺子寬延ノ頃蜘蛛ニ畏レ墓ニ色ヲ変スル類

ハ活物ナレバサモアリヌベシ京都ニ名高カリ

シ半仲トイヒシ優曲ノ者ハ刀豆ニ畏レ色変リ

魂ヲ失フ是ヲ秘シテ和物ニシテ出スニヨク知

リテ其坐ニタニリ得ズ又導引ノ手術ニ妙アル

醫人アリ高麗煎餅ヲ見テハ乍ニ色青クナリ畏

ル尙其シ小田垣氏聞テ但馬出石トイフ處ニ

モ刀豆ニ畏レテ是ヲ視ルト蛇蝎ノ如クニケマ





